The Japanese School of Johannesburg NEWS Letter
めざせ！南十字星
6
２０２６(令和８)年
月１９日発行
ヨハネスブルグ日本人学校 学校だより

学校教育目標
国際感覚を身につけ、確かな学力と
豊かな人間性を備えた児童生徒の育成
合い言葉：自立・貢献

小さな学校

校長 石山 秀樹

今回は、既にヨハネスブルグ日本人学校に通っている皆さんにはある意味で「当たり前」であることをお伝えしようと思います。

私はこの４月に埼玉県の公立中学校からヨハネスブルグ日本人学校（以下、JSJ）にやってきました。前任校は生徒数で言えば現在の本校の２５倍以上という比較的大規模な学校で、生徒会活動も部活動も数多くワイワイとやっている印象が強い学校でした。

そこから全校児童生徒３０人の学校に赴任が決まったとき、「果たして、自分も受け持つ授業はどのような様子になるのか」と考えさせられたことを思いだします。現在の授業でよく用いられる「話し合い活動」などはあまりにも少人数では難しく、一般的にも「多様な人間関係から学べないのではないか」「競争の機会が少なく、成長が阻まれるのでは」といったことが懸念されるところです。

しかし、私は着任から２か月余りを本校で過ごす中で、それらの懸念は杞憂であると感じるようになりました。むしろ、小規模校だからこそ実践できる、価値ある教育はいくつも見出せると考えています。

まず、全ての児童生徒が役割を（否応なく）担うということです。規模の大きな学校では、行事や委員会活動などで役割を務めたり、皆の前に立ったり、発表したりといった機会はどうしても限られます。しかし本校では、児童生徒全員に活躍の場があります。というか、活躍せざるを得ません。今年度の本校がこれまで実施してきた全校遠足、幼稚園国際交流、野外学習活動、ふれあいウィークといった各活動でも、子ども達はそれぞれにリーダーシップを発揮したり、役割を自覚して積極的な行動をとったりするなど、立派な活躍を見せていました。頑張る誰かにお任せするのではなく、学校の一員としてそれぞれが責務を果たすことは、将来の社会において求められる「支えられる人から支える人」に繋がる一歩です。

次に、教職員が児童生徒一人一人を丁寧に、深く理解したうえで教育を実践できることです。そもそも本校の派遣教師達は皆、日本の各都道府県から選抜されてきた力ある者です。その教師が担任として受け持つ児童生徒のみならず、全教師が全児童生徒の状況や課題を把握し、教育にあたっています。子ども達と教師の距離、家庭との距離も近く、緊密な連携をとることができます。先の野外学習活動では、ブライ（南アフリカのバーベキュー）や中学生男子と同じ棟での宿泊で、楽しいのみならず普段目にすることのない子ども達の一面を知ることができました。棟のリビングで中学生と一緒にサッカー･ワールドカップ 南アフリカ代表の初戦を応援できたのは、良い思い出です。

さらに、異年齢の子供同士が実に豊かな人間関係を築けることを挙げなくてはなりません。確かに同級生は少なく、クラスでの交流は限られます。しかし、いったん休み時間となれば、小１から中３まで一緒に外で遊んでいるのがいつもの姿ですし、行事で同じチームになれば仲良く活動します。年長者は年少者を自然に気遣い、年少者はそんな年長者の姿に憧れ、「いつかこうなりたい」と思いながら成長していきます。異年齢集団で過ごす経験は、自ずと共感性や協力性、相手の立場や状況を理解する力を育みます。これもまた、多様な人々との協働が不可欠な現代社会に必要とされる資質です。

少人数とは、単に「人数が少ない」ということではなく、一人一人を大切にできる、一人一人が学校の担い手となる環境です。その環境の中で子どもたちは、主体性、共感性、協働性、リーダーシップ、責任感そして国際感覚を身に付けていきます。

小さな学校だからこそできる教育があります。「小さな学校としての特質」×「在外教育施設としての特質」が、JSJの目指す「自立・貢献」の教育です。本校ではこれからも、子ども達に「未来の国際社会を生き抜くために必要な力」を身につけられる教育の実践を追求してまいります。保護者の皆様、学校を支えていただいている皆様には、引き続き温かい御理解・御支援を賜りますようお願いいたします。

JSJ News Blog: JSJ NEWS EXPRESS